

ある方から「権馬さん」のことが書かれた自分が知らなかった資料を教えてください、安岡権馬正徳のことを見直しました。それを安岡権馬正徳傳(壹から四)5月としてまとめました。

安岡権馬正徳の誕生と養子

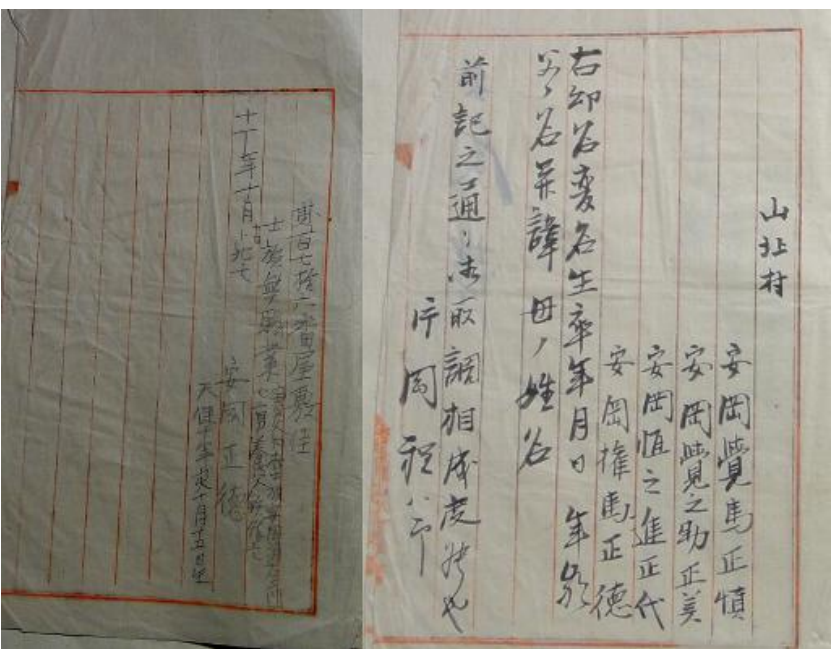
安岡正徳の生まれは我家(お下)の三代目となつている安岡源右衛門正方の二男として天保十年十月十五日に生まれました。安岡権馬正徳、権馬は名前で正徳は諱です。明治三年、四年の太政官布告で苗字と実名に関する規定『明治五年太政官布告「従来通称名乗両様相用候輩自今一名タルヘキ事」』により、諱と通称を併称する事が公式に廃止されます。名前としていづれかを選択することになり、権馬正徳は正徳を通称としました。藩政時代から明治維新の文書記録には権馬あるいは安権と記載されています。自作の文書には諱で書くことが多いです。権馬の兄恒之進も諱の正代と書いています。我家関連の墓標の名が諱のみで彫られているのは安岡権馬正徳の正徳と覺之助の次男安岡厩次郎正風の正風だけです。諱を正式の名前としたのは権馬の正徳、厩次郎の正風だけでした。

安岡正徳は現在お上と呼称される家の養子になります。お上、我家のお下の呼称は養子に行つた当時にはありません。この二つの家は本家から分家し、お上(当時はお上ではないが)の父十作が山北村少し離れた富家に土地に住みますので、お上の墓は富家山にありました。その後富家を離れ、本家の隣に住み、権馬が養子に行つた頃に今の位置、我家の西隣の少し高い場所に住み始めました。それ以前にお下の分家である文助がそこより西に住んでいました。誰が言い出したか不明ですが、東に位置した本家、お下、お上、お西との呼称ができました。権馬の生年月日を書きました。これは村役場の記録に基づいています。この記録資料の最後に片岡程八郎(下写真)とあります。香我美町史によれば片岡は明治二十二年の山北村の初代助役です。明治二十二年に初の村議会議員選挙が行われ、村長・助役は当選した議員から選ばれますので、それ生まれた助役です。

この資料を見ると前述の生年月日記載以外にも家系圖など異なるのは女性の名前の記載があることです。戸籍は宗門改帳、過去帳を参考にして原本を作つたのでしよう。この戸籍簿を村に要求したのは明治に我家の養子に来てくれた又彦です。これに基づき、源右衛門正方が作成した先祖書に書き足しています。

この資料は数頁あり、安岡権馬の記載が二頁あります。薄い墨の(下左写真)では安岡正徳とあり、實父と養父の名が書かれ、式百七拾六番屋敷住とあります。

この住所の書き方は屋敷番と呼び、現在の番地方式に明治十九年に変わる前の形式です。名前が安岡正徳とあるので、前述の太政官布で名前に諱を選択したことを示しています。



安岡権馬とお上

安岡正徳は戸籍に實父源右衛門、養父鉄作とあります。本家の隣に住んだ鉄作の養子に権馬は行きます。養子に行った時期ですが文助の家系圖には弘化三年十一月養子の願書を出すとあります。権馬は天保十年生まれですので七歳程となります。権馬の姪である房が祖母(源右衛門の妻 権馬実母)から聞いたことなどを書き残した十数頁の資料があり、そこには権馬が養子に行ったのは三歳となっています。房は学ぶ機会がなかったので、この資料もひらがなと漢字かななどで書かれています(左写真)。正徳に関する箇所を抜粋して読み易く書き直したのを次に示し(原文左写真三行目から)ます。

引用

お上の安岡てつ作と申す人は子がなくて、内から正徳と申す人を三つのとしに養子にやりましたと。それから正徳と申す人を七つくらいの方に、てつ作と申す人が西川のまいけの森できじをうちまして、とりに行くに松の木がねこぜつて居ると思ふて、上つてみるとうわはみで首を立てて赤い舌を出して、きじをねらいつめておりましたと。それから帰るなり(左原文ここまで)大熱となりみてましたと。奥(をく)さんは帰りましたと。子供ばかりで世話の仕手がないから内えつれてきて家督も預つて世話をして、山本から嫁をもらつて、家を立て、今のお上のです。家が大きすぎるから元の家督ではたたと申して内から和食を分けてやりましたと。おばあさんの話でした。おもやかに富家をやりましたと。かどたから郷士の株をやりましたと。三軒からの持合せでしたと山本から来ておつたおばさんは三軒とももやですからと申してきれいにつとめましたぞよ。今ノ人ハ知らんからおしえてあげる

右正徳二 長男 太郎工殿 三歳でてみてた

長女 せつ子 谷へえんつづきました

二女 竹代 いけの上へえんづきました。

二男 席一郎

席一郎三才の時正徳は松山の獄につながれ、内を出た時は一月頃でした。その年九月十五日になくなりました。正徳の妻はみもちでありました。その年の七月に二人子をうみました。

二人とも死体で難産で遂にいざりとなりました。いざり、こどもで困るから又内えつれてきて、おばあさんと私とが世話をしました。やれやれ病人もなおり席一郎も十四歳となり、うれしやと思ふ内又母上がなくなりました。

引用おわり

補足

・てつ作(鐵作)の死と養子の時期

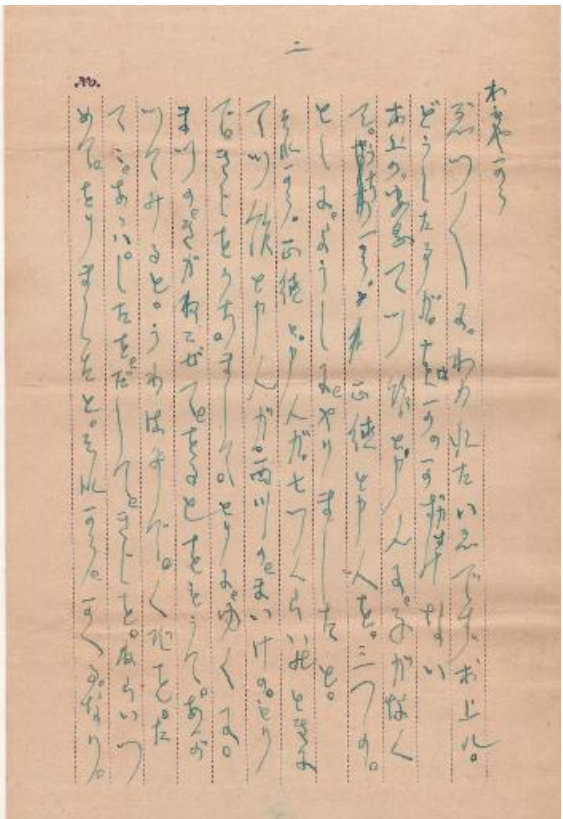
鐵作の死は墓標から

弘化三年九月

家系圖の正徳養子に行った時期
弘化三年十一月とあるのは家督を
継いだ時期と思われる。

・死の原因 うわはみ ハミのこと
ママシに咬まれて亡くなったのか。

・山本から嫁 正徳の嫁・山本安次
の二女(繁)、安次は恒之進と一緒に



江戸へ修行に出掛けている。左記の長男の没年から結婚は文久三年頃と思われる。

- ・和食を分けてやる 和食の地券は我家にあります。が虎一郎所有となっている。
- ・おばあさんの話 房の祖母 源右衛門の妻

源右衛門↓息子の恒之進の時代↓明治維の移り変わりを見ている。

- ・かどたから郷士の株 お上の初代十作は門田家を祖先としている。

郷士職は楠瀬作右衛門から譲受ています。

墓標に十作信久と門田系列の諱先頭文字「信」を使用 鐵作には諱なし。

- ・長男 太郎エ(太郎兵衛殿 墓は四坊山にあり没年 明治元年辰七月廿六日年三才。

- ・母上がなくなり 帑一郎*墓標は虎一郎)の母 正徳の妻 明治二十一年に没。

権馬の叔父文助日記から権馬関連を抜き出すと次の記載があります。

- ・嘉永元年(カゾエ十歳)四月同八日権馬立阿ゲ祝

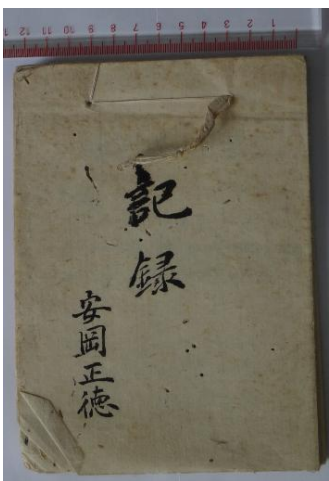
- ・安政三年権馬(十七歳) 同廿七日 今日祖神祭(*先祖祭)当家権馬方にて行未恒之進同居中

- ・安政五年権馬(十九歳)同九日日和権馬試乗 御駆初

三才で養子に行った権馬は養父、養母と暮らしたが三年後の弘化三年に養父が亡くなり、養母は実家に戻り、房の記録を見ると実祖母、兄、姉、弟と暮らしたのでしょうか。左記の文助日記から、安政三年の十七歳まで兄と一緒に暮らしています。その後御駆初頃から、現在のお上の位置の家に住み始めたのでしょうか。この状況、早く父を亡くし家督を運営した実兄恒之進に似ていますが、兄は四代目であり運営の仕組みが出来ており、番頭もいたようです。房も「家督を預かって世話」したと書いていますので、運営の仕組みは未完で、番頭とともに作り上げたのでしょうか。

安岡権馬と武芸

安岡権馬正徳の武芸記録を記録帳(下写真 表紙)から紹介します。この武芸記録は安岡権馬の祖父からあり、いずれも自分でそれぞれの記録帳(帖)に書いています。



- ・弓術 幼少之前方安岡恒之進射場ニ而稽古為シ

嘉永四辛亥三月(十二歳)加藤山三郎江入門通多納約為す

- ・馬術 幼少之前方安岡恒之進馬場ニ而稽古無シ

嘉永六癸丑之正月(十四歳)磯部勇助江入門

- ・砲術 幼少之前方安岡平八筒場ニ而稽古為シ

嘉永六癸丑之三月(十四歳)高村造酒之丞江入門

- ・釵術 幼少之前方水□□次弟子ニ而

稽古為シ嘉永六癸丑之三月(十四歳)方手島市平江通多修行□

- ・鎗述 土方謙五郎弟子

安政三丙達三年(十八歳)方業前相初

- ・学問 幼少之前方黒岩仙碌弟子□

嘉永五年壬子之三月(十三歳)方升村善之進入塾□

兄恒之進の入門開始時期は次の通りです。

- 弓術 十四歳、馬術 十二歳、砲術 十九歳、釵術 十四歳、鎗述 十四歳

何故か学問について恒之進には記載がありません。両者の入門年齢は砲術を除き現在の中学生以前に始めています。砲術は新しい武芸で、恒之進が始めるのが遅かったと思います。

道中日記

安岡権馬が書いたと思われる文書がいくつかあります。まず、道中日記(下写真表紙)を紹介いたします。道中日記を書いた時期のことが前掲の記録帖に書かれています。

- 一文久三癸亥六月十四日海防小頭役被仰付
- 一元治元甲子三月廿五日京都御警護御用相業り四月五日北山通出足同年十一月十六日帰宅
- 一元治二乙丑三月十四日海防小頭役被仰付

道中日記は右記の二番目で、藩の命令で京都へ清和院門の警護で出掛けた元治元年の三月廿五日からの記録です。

道中日記以前の祖父、兄の旅

権馬の旅以前に祖父廣助は大坂から伊勢、京都を巡り、兄恒之進は江戸へ行き一年間滞在しました。この二人と大坂までのルートは同じですが、旅の目的が違っています。廣助は湯治と称し出国し伊勢参りで伊勢から京都に回り、帰国するまで京都か、大坂に長期滞在した観光旅行です。当時の観光ブックを参考しているように色々寄って観ています。

祖父廣助と違い孫の二人は藩命による旅・出張です。それでも高知から山を越え丸亀に着いた後、三人は金毘羅にお参りしています。恒之進はいくつかの通りすがりの観光、権馬の道中日記には通り道の観光は須磨で見物の記載がありますが、どこを見に行ったのか未記載、足利尊氏の戦いの場所を見に行ったのか。

*廣助の旅、恒之進の旅について次のホームページからPDFを次の検索し参照できます。

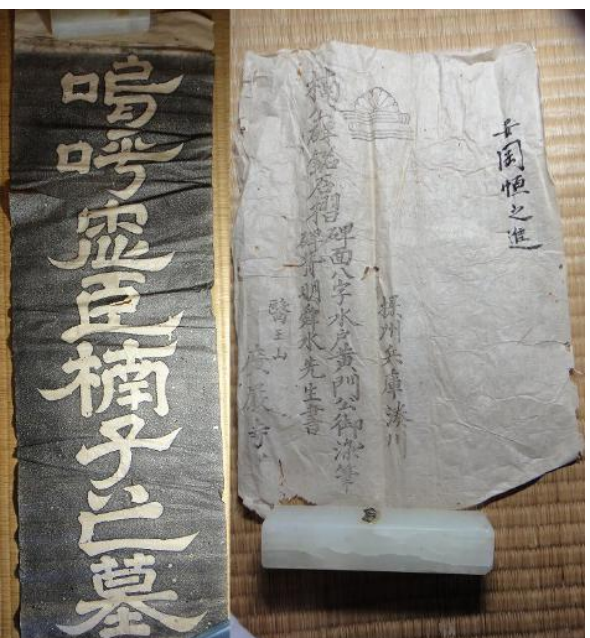
安岡の自宅宅<http://yasuoka-ke-sakura.ne.jp/>↓安岡の家にあった文書↓●旅日記↓

- ・廣助旅日記 または
- ・恒之進の旅日記

楠公御墓訪問

現在では観光地である楠公御墓に、権馬は参拝しています。楠公の御墓は水戸光圀の書「嗚呼忠進楠木子之墓」が刻まれた碑があり勤王の聖地になっていました。恒之進はこの拓本(下写真)を廣敵寺から購入しています。藩政時代は廣敵寺で墓を守っていました。現在、廣敵寺は湊川神社の裏手に小さな庭とお堂ですが、残っています。昔は楠公の御墓の位置までの広い境内をもった寺で、明治に廃仏毀釈の流れでか、湊川神社が造営され御墓はそちらに移管されました。この拓本は現在も神社の入口の受付で売られています。

権馬は拓本を購入した記録はありませんが、歌を作っています。歌は推敲し書き直し、前の歌に張り紙し書かれています(次頁下写真右側)。その後「是ヨリ楠公御墓ヲ拝ス」とあり、次の歌(下写真の左側)があります。



かしこくも清き流れの
きく水を

具(*く)みし眞心猶

みかく也

廣助の日記にはここを訪ねた記録はありません。高知は中世から南海朱子学に基づく勤王思想が根付いたと言われています。山内公紀史料に正月に皇居遙拝したとあります。恒之進、権馬の行動はこの思想に基づいているように思います。二人とも外で学問を学んだ形跡がありますので、南海朱子学を習ったのでしょうか。廣助はそのような学問を習った形跡はありませんので孫との行動に違いが出たのか。文助も京都伏見に剣術の修行に行ったことになっていますが、その詳細の記録はなく楠公を墓参したか不明ですが、他家に「楠公之御筆拝見」で訪問したり、「元治二年正月四日玉櫛記井楠公記読孫二百人首論語教ル」とありますので楠公に関心はあったのでしょうか。

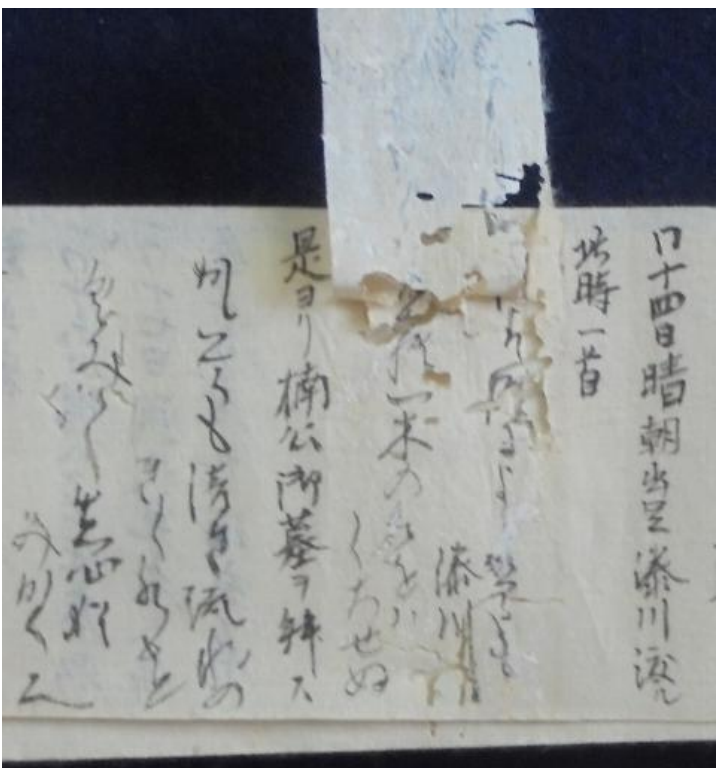
京都での生活

権馬二十五歳元治元年四月五日に出発して京都に十七日十三日間で到着、恒之進は八月七日から十九日で十三日間で到着。廣助は三月十一日から三月廿六日十六日間で到着、概ね同じ日数で山北から京都または大坂まで旅しています。

権馬は京都へ向う時の届けに自分の同行者として従者 山本四郎、家来 鉄次の三人で三人扶持を要求しています。山本四郎は権馬の妻の実家山本安次の二男です。京都到着後一ヶ月も経たない五月十一日に藩に従者の交代届を行い、山本四郎は帰国しています。これだけを見ると藩費で類族を連れてきたように見えると流離譚に書かれています。これに関して流離譚では山本四郎も勤王党に加盟しておりその関連で密命を帯びた帰国ではないかと後で書き足しています。藩から扶持を貰い、藩の仕事しながら勤王派の活動をする。何か、仕事と活動が矛盾しているように思うのですが、勤王の人々は藩、国を良くするための活動で矛盾はないと考えていたのでしょうか。脱藩した人、藩内で仕事をしている人、両者が同じ目的の活動、解りにくい面があります。

藩命である清和院の門番の仕事は日記から徹夜仕事のようにです。権馬の京都滞在は四月十七日から七月廿六日の九十八日間です。その間に清和院の門番勤務と思われる日数日記に出る清和の文字カウントすると三十三日となり、滞在の日数の三分一です。

恒之進の江戸生活の日記には日常生活の買物等のことが書かれています。権馬の道中日記には書かれていません。恒之進は半分自費出張で行動も各自任せでした。権馬の場合も京都までは個人行動でしたが、京都では藩邸での生活していたようで、日記に帰邸の文字が出てきます。食料の購入など生活費用に心配がないと思いますが、時々国許から二十両、四十両と送って貰っています。家の主人がいまないので、どのようにお金を工面したのでしょうか。この送金は後述しますが、お土産を購入する資金でもあったようです。



長邸・大佛

藩の仕事以外の権馬の生活を探ってみます。日記に「長邸」の文字が八回出てきます。長邸とは長州藩邸です。その頃の長州藩は武力倒幕、土佐藩は公武合体と政治方針が違っていました。恒之進日記を見ると土佐藩邸への入門札が必要です。長州藩邸では入門札は不要で、出入が自由だったのででしょうか。長邸の訪問した時の記載箇所石川あるいは誠之助の名が出てきます。これは中岡慎太郎の変名ですので、中岡慎太郎も長州藩邸に出入していたのでしょうか。中岡慎太郎著の「時勢論」の第一回(関連で第四回まで続く)は慶応元年の冬に出版されますが、時勢論の文字が元治元年五月十一(一カ)日の道中日記に出てきます。

「存外時勢之話ノ無キ成実ニ案外之事ニ付・長邸江行誠之助我邸内之論同意ニ付・・・」
どのような話があったか不明ですが、中岡慎太郎の時勢論の第一編(論策一 時勢論)は薩長同盟の後で、薩長とともに戦い尊王攘夷を達すると説いているので、この議論とは異なります。ここで攘夷は開国反対でなく、民族・文化の堅守を言っています。宮地佐一郎著「中岡慎太郎」からの孫引用ですが中岡慎太郎を「戦鬪的民族主義者」と呼んでいます。権馬も最終的には、中岡と同じ面があるように思います。孫引きになりますが、この日記と同じように中岡慎太郎と安岡権馬が会ったことが、平尾道雄著「中岡慎太郎」に掲載されている山本頼蔵(権馬の日記にも山本頼の名がある)日記に記載されていますが、話の内容は書かれていません。

もう一つの権馬の京都生活の探索キーに「大佛」訪問があります。大佛の字は四回出てきます。大佛は勤王の隠れ家だったようです。権馬は京都に着いた日に大佛に行き支度をして、その後「京着」としています。それから半月過ぎた五月二日以降は大佛を訪ねていません。大佛に行かなくなっても、勤め日以外に他藩の人も含め誰かと会い議論・話をしています。また、六月廿七日にどのような仲間か不明ですが、一緒に天誅組として出陣し捕縛・処刑された嘉助の慰霊祭を行っています。その後、六月二日に御目附に呼び出されています。何を言われたのでしょうか。その後の行動に変化は見えません。

大佛に行かなくなつて一ヶ月後の六月五日に池田屋、そして大佛が手入を受けています。日記を読むと五日「北邸へ行大論方」翌六日「朝三条通騒動聞合ハ五日夜半比方之事」とあります。北邸とは京都の北にあった薩摩邸でしょうか、朝戻っていますので、一晚論争をして土佐藩邸に戻ったのでしょうか。藩邸の近くの三条通に池田屋がありましたので騒動とは池田屋手入のことでしょう。権馬は山北に籠っていたのではなく、勤王関連と様々な付き合いがあり、偶々藩に呼ばれ京都に出たのではなく機会を狙って出たように思います。

禁門の変と帰国

元治元年七月十八日に禁門の変がありました。その七日後に京都土佐藩邸にいた要員は全員立ち退くことになりました。道中日記には帰国した日付は書かれていません。日記の最後は十月十日で「サイ代百錢渡」、その三日前にも同じような「サイ代四百錢渡」とあります。両日の間の九日に門田光之助より書状来るとあります。その後に歌(下写真の後半部分)が書かれているようです。私は読めませんが、流離譚から引用すると次のようになります。

いたはる□□□紅葉の

舞も見はてぬ身こそはづかし

流離譚では歌の解釈を、紅葉と血の紅を合わせて権馬の無念があるのではないかと書いています。

この歌の直前の「門田光之助方書状来ル」とあります。歌とこの書状が絡んでいると思います。

書状を出した門田光之助はその頃、現在の門田屋敷跡(富家通交差点の近く)に住んでいました。その北側に本家があり、当時は覺之助が当主でした。覺之助が血書誓約「土佐勤王黨」誓約書を預けたのがこの門田光之助と言われています。送られて来た書状には覺之助が捕まり類族預かりなつたこと、または奈半利河原で二十三士の惨殺が書かれていたのではないでしようか。

奈半利河原で二十三士の惨殺された元治元年九月五日の事件です。日記には何も書かれていません。ですが日記の後半に首謀者の清岡道之助、清岡作之助などと記名された口上覚が書かれています。八月十日の日記に陣屋へ引移るとあり、八月十三日に山本四郎の替りに従者となった大坂屋新次郎に壹両を渡しているのので解雇したのではないだろうか。家来の鉄次に木、米などの費用を与えているので陣屋でも自炊生活なのだろうか。

十月十日で日記が終わっています。前掲の記録帳に十一月十六日帰宅とあるので、八月十日に陣屋に引き移ってから三ヶ月間経て帰宅しています。四月十八日京都の藩邸に入り七月廿六日に出ています。それと同じ期間大坂に居ます。藩の仕事について日記に記載はないのですが、八月卅日に扶持渡とあるので藩の仕事はしていたかもしれません。

日記の最後の箇所には次の記載があります。

出(足カ)／緒方／一六六文 足達池内／松山

同／一六六文 高橋宇賀松山／池内久保

緒方とは適々齋塾を運営していた緒方洪庵で、その塾に入り学問を修めたのではないかと思われました。権馬が大坂に滞在していた元治元年頃、洪庵は江戸に行き塾は閉鎖されていた可能性がありました。この頃、朱子学を教える懐徳堂もありました。緒方と書き残した理由は不明ですが、権馬は懐徳堂で学問を修めていたのではないかとも思われます。勤王の志士との会話の記載もなくなっています。十月の日記に「サイ代四百」などサイ(副食品)の購入と思われる記載があります。帰国、帰宅したことは道中日記に何の記載もありません。旅の後半、何をしていたのか。

安岡権馬正徳傳 壹の終わりに

一 お土産

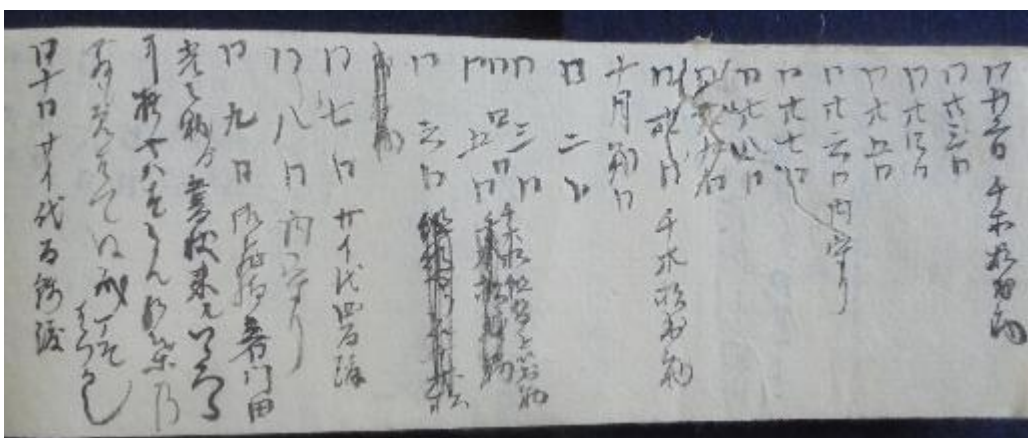
廣助、恒之進と同じように権馬もお土産を色々購入しています。依頼された物もありますが、興味を引いたのを次に示します。合計金額約五十両となり、送金額を使い切っています。この頃、飛脚により現在の現金書留か、為替の送金が可能だったようです。

安岡寛馬からの依頼

・ 懐劔 など刀劔

・ 四劔重 壺組 但黒地二巻絵(蒔絵カ)付 内ノリ金六寸七歩

・ スゴロク 壺切 *すごろくの単位切なのか



長男太郎兵衛の墓標から元治元年と推測されます。

どれが新婚の妻のか不明ですが、女性への土産を色々買い揃えています。

- ・アヤ地 振袖物 壱両 但色壺棟り
 - ・フタイ香 代二朱
 - ・ヒチリメン 四丈七尺 但ハヽカ子壺疋四寸 上
 - ・白加賀 壺疋半 上
 - ・黒リンス 壺面 但振袖地模様フリ付 或ハ染模様カ無地□
- その他

・百人一首 一卷 *一卷とあるのでカルタでなく読み物

前述に文助日記で「孫二百人首論語教ル」とあるのはこれで教えたのかも。

・硫黄代 壹両壹歩 弥太郎方請取分

式歩 弥吉郎分出替 *硫黄は高知の産出は少ない。火薬の原料として購入か。

・式両廿歩 足袋 壺両三朱 ハサミ *足袋など高い

二、龍馬と権馬？

「お龍と横須賀 市史研究 横須賀 第四号 2005年 3月」を参考に龍馬／お龍と権馬との接点などを紹介します。

・その一 菅野覚兵衛と庄屋千屋

お龍の妹君枝が嫁いだ芸西の菅野覚兵衛は改名の理由は不明ですが、旧姓は千屋寅之助で和食村の庄屋千屋民五郎の三男です。この千屋民五郎と廣助と関連があり家に「口上覺 千屋民五郎宛(下写真)」が残されています。資料は天保十一年五月に書かれ凶作で加治米の用捨(土地代の破棄)願いが百姓の連名と最後に和食村庄や千屋民五郎殿宛で書かれています。連名の百姓が庄屋 千屋民五郎に口頭で願ひ、その覚え書きを廣助に渡し、それが我家に残っていたのでしよう。房が書いてある権馬に渡した和食の土地に庄屋 千屋が管理していた土地が含まれていれば、千屋と権馬とは付き合があつたこととなります。世界は単に狭いということでしょう。

書状の内容を次に示します。

口上覺

- 一 山北村住居郷土安岡廣助殿和食村二田地 御座候而私共数年百姓二相成居申候處凶年之節御加治米者用捨二ハ預リ不勝手之者へハ越年米与之貸付且地下困窮者被義補米遣之數事 行届深切ニ預リ難捨置私共一同御達申上候間 宜御詮義被仰付被為下度(なしくだされたく)奉願上候 右之趣宜敷御執成(おとりなし)被下度奉存候

以上

吉助

覺助

天保十一年



和食村庄や

千屋民五郎殿

・その二 龍馬とお龍の出会いと権馬

「龍馬にとって特別の存在であったお龍」との出会いは、権馬も訪れていた大佛だったようです。権馬が大佛を訪ねていた元治元年頃に龍馬も行っていました。大佛にお龍の母貞が働いており、お龍は別の旅館の手伝いで預けられていました。元治元年五月頃に貞にお龍のことを話してお龍と龍馬が出会い結婚したと参考にした冊子に書かれています。龍馬三十歳、お龍二十四歳です。権馬は大佛で二人を見かけたかも知れません。

五月四日の道中日記に「晴朝清和方婦大井氏書状開見晝比大高又次郎ヲ尋又ノチ山七ヲ尋不居合不斗坂良二面會シハラク談而帰川越俟先キ供京地出足」とあります。流離譚に坂良は坂本龍馬ではないかと書いています。変名で書かれたり、短縮されたりしているので特定出来ませんが、時期的には坂本龍馬が京都にいた頃ですので可能性はあります。

・その三 近隣の勤王の志士

龍馬とお龍の話題から離れます。

天王山で割腹した者に千屋菊次郎がいます。千屋寅之助(後の菅野寛兵衛)の従弟になります。権馬は長州藩邸に出入していますので、道中日記に名前は見掛けませんがどこかで出会ったかも知れません。奈半利の二十三士の口上覚えに清岡道之助と並んで新井(にい)竹次郎の名が、日記に記載されています。新井竹次郎は香美郡香宗村庄屋北川直来の次男です。本「中岡慎太郎(宮地佐一郎著)」によれば中岡慎太郎の説得で北川村総老の新井家に行ったとあります。山北と香宗は隣村です。二人どこかで会っていたかも知れません。山北近隣の勤王の若者たちに出会があったか不明ですが、当時の若者が勤王の勢いの中にいたのです。

権馬を色々な資料から探索しました。房の残した資料に養父、養母との別れなど権馬に関するところがあのように詳しく書かれていたことは以外でした。幼くして家督を継いだこともあり、皆が気にかけていたのでしょう。文助日記によると嘉助は時々城下に出ていたようです。兄からの手紙を読んで躊躇なく勤王黨へ盟約したのでしょう。権馬は家の主ですが、同じようにので度々出ていけないと思いますが、道中日記に書かれた勤王志士としての下地はどこで造ったのでしょうか。

安岡権馬正徳傳 貳 へ続く

安岡の家住宅△<http://yasuoka-ke.sakura.ne.jp/>

↓安岡の家にあった文書

↓●安岡権馬正徳傳

↓●安岡権馬正徳傳 貳

PDFを検索

以上